

日本銘石「佐治川石」

1. はじめに

鳥取市佐治町で採取される「佐治川石（さじがわいし）」は、日本の銘石の一つに数えられ、全国の愛石家に長年愛され続けています。

日本四大銘石・・・京の鞍馬石、滋賀の瀬田川石、紀州の熊野石、佐治川石
又は、鞍馬石、薩摩石、熊野石、佐治川石

日本三大銘石・・・神居古譚石、瀬田川石、佐治川石

佐治町の人には、古くから庭石や靴脱ぎ石として珍重され、大正中期の頃に、前佐治郵便局長の上田金一氏、智頭郵便局長の石谷直治氏が佐治川石の価値を認め採集、宣伝したと言われていました。

その当時から、佐治川石を造庭に使用するようになり、大邸宅や旅館などの庭石に使用され名高くなってきたと言われていました。

また、京都方面にも多く搬出され、前庭園石、盆栽用として全国的に名声を博するに至ったと言われていました。

2. 佐治川石の分布

佐治川石は、佐治川の何処にでも存在するというのではなく、森坪から加茂下までの約3 kmの間に最も多く見られ、輝緑凝灰石と呼び、火山灰が堆積固結し変質したものとされています。

佐治川石は、もともとは古生代中期から中生代中期（約3億年前）の噴出物が、高い圧力を受けて変化した「変成岩」の一種で、地質学的には北九州から山陰地方にかけて帯状に分布する「三郡変成帯」とよばれる変成岩の分布する領域にある「緑色千枚岩」や「緑色岩」と区分されています。

地殻変動によって地表面に現れ、風化浸食の働きにより転石となり、川に流れ出た岩石は、流水の働きを受けてみがかれ、何十万年という長い月日の間に固い部分が残って、表面が凸凹になったと考えられます。

このように、佐治川石の特徴は、表面が凹凸に富んでいることや、緑泥石など緑色の鉱物が含まれているため、色が全体的に青黒く、所々に緑がかっているのが特徴です。

そして、森坪、加茂間の兩岸の岩石は佐治川石と同質の岩石である点から、佐治川石の産出地帯であることが考えられます。

そのほかでは、小さい盆栽用の佐治川石は、案外用瀬町から河原町付近の間に多く存在すると言われていました。昭和34年の伊勢湾台風の際には、河原付近の千代川河川敷で盆栽用の佐治川石を大量に採取したとの話もあったそうです。

3. 佐治川石の分類

佐治川石は総合して学名を輝緑凝灰石と呼び、現在 10 種類に分類できると言われています。（昭和 40 年頃は 7 種類）

1. 佐治川本（ほん）石（真黒（まぐろ）石）

明治、大正、昭和の初期に、金石と呼んで庭石を主体として採石した頃の石肌と姿を持つ佐治川石としては、もっとも古くから賞美され質の良い物で硬度も高く重量感がある。鉄分も多く含まれ、中にはさびを現し銅色のものもあり瀬田真黒石にも似ている。真黒石が一番に評価され銘石として取り扱われている。

2. 佐治川灰地（はいじ）石

真黒に次ぐ良質のもので光沢はなく、木灰色艶消しの表情を呈し、地肌に特殊な味を感じ、薄墨色と浅い青地色等で、中には白線が適度に浮立ち白タスキをかけた物もある。水石としてもふさわしい。

3. 佐治川雲懸（くもかけ）石

色は黒または灰色が多く、地肌は白雲のむらがるようなまだらをしており、乱れ模様がこの石の特徴です。あでやかな色彩と色の地肌が浮き彫りに見えるものは特に面白い。雲懸けの色彩に富み浮き出た物が良い。

4. 佐治川糸懸（いとかけ）石

地肌は余り艶でない物が多く、表面に浮き出た比較的線の細い糸懸けに近い姿の石で、色は茶褐色石英をかみ、滝の風情を示すものもある。

5. 佐治川碧譚（へきたん）石

質は極めて硬質の漆黒色で、中には少々青味やクリーム色、白を含むものもあるが、いずれもよく生まれ、きめ細かな見事な光沢のでるものが多い。型は丸みを帯びた物が多く、飾り石として賞美される。

6. 佐治川虎（とら）石

茶褐色で中には薄墨色のものもある。黒と黄色、黒紫に白または茶色系が交互にほとんど一定の幅で条線を表し、比較的表面にくびれが少なく、中に筆書の様相もあるが、線と線の区切りが凸凹を表し、色は虎毛を想象し極端な物ほど面白い。この石は極めて硬質で光沢の出るものも多く、瀬田の虎石に似ている。

7. 佐治川紋(文様：もんよう) 石

色、柄ともに多種多様で、光沢のある物で佳味のある物、文様のよくでたものが良い。飾り石に類する。

8. 佐治川霰（あられ）石

霰のような大小の白いまだらの模様がある。

9. 佐治川巢立（すだち）石

巢立った鳥の巣の跡のような石？

10. 佐治川天平（てんぺい）石

石の上の部分が平らになっている石？

4. 石ブームと乱採

一部の大邸宅や旅館などで見られた佐治川石が、一般の愛石家の間に広まり始めたのは、高度経済成長期に入った昭和 30 年頃のことだと言われています。

はっきりとしたことは分かりませんが、背景には全国的な石ブームがあったと考えられます。当時、全国各地で愛石家の同好会が生まれ、百貨店などで石の展示会が開催されました。そんな中で、美しい色と造形、そして自然の趣を持つ佐治川石が広く受け入れられたと考えられます。

皮肉なことに、このブームで注目を集めたことが乱採を招き、良質な石の採集が困難になりました。

現在、佐治町内では佐治川石を使って造られている庭園らしい庭園はほとんど見当たらないというのが現状です。

5. 佐治川石の保存

佐治町の人々は、この佐治川石を佐治川に保存し観賞したい思いであったが、年々盗石、採集され持ち去られることが多く保存策をと、昭和 30 年に「佐治石保存協会」を設立し、鳥取県の許可を得て、佐治川石の保存に努めました。

また、昭和 34 年には、「佐治川保全協会」と名称を改め、佐治川保全上支障のない個所で、流水の妨げとなっている佐治川石を協会が一括採石し保存しました。

当時は、役場、学校、保育園などで保存し、町外の公共団体（県庁、高校、市役所、警察、裁判所、NHK、鳥取大学、県民文化会館など）に無償で寄贈。

しかし、そうした協会の取り組みを無視し、強引に佐治川石を採取するもの、機械器具を使用して大々的に盗石するものなども続出し、昭和 40 年 10 月 1 日鳥取県知事名で佐治川石の採取の全面禁止を行いました。

現在、佐治川周辺は県の自然環境保全地域に指定（昭和 59 年 9 月 25 日）されており、なかでも森坪から余戸の間は特別地区として、許可なく石を採取することは禁止されています。

6. 黎明の庭

平成4年、当時の佐治村では、村制施行80周年記念事業として、佐治川石の保存と展示を目的に、佐治川石をふんだんに配置した庭を造りました。（総事業費およそ4千万円）

「黎明の庭」と名付けられたこの庭は、当時の大阪芸術大学学長の中根金作氏によって造られました。

配石された石の一つ一つが「佐治の誇るべき伝統や文化の事蹟（出来事）」を表し、石組群は「大小の国づくりが始まっている様」を、そして庭全体で「大海原の中に新たな国の始まり黎明期（夜明け）を迎える」佐治町の繁栄を表わすとされています。

中根金作さんは、黎明の庭以外でも、足立美術館、大濠公園内日本庭園、二条城清流園など全国の数多くの庭を手掛けておられる著名な作庭課家でもあります。

7. その他

1. むらの池

町内外の人に佐治川石を鑑賞していただこうと、平成46年より大小約130個（推定500万円）の佐治川石を使用して造られました。

2. 佐治川石の碑

碑文「銘石 佐治川石 佐治川の恵みを 次代に残そう」 昭和53年6月建立 佐治町高山地内、国道482号を森坪から西に約500メートル上がった南側の道路脇にあります。

佐治川石は、このあたりを中心にして上流、下流及び谷川から産出し、特に大洪水の後によく現われた。自然環境保全地区指定を記念して佐治川保全協会の手により建立されました。